



和 ～心をつなぐ～

令和5年5月31日

第1号



オンリーワンの存在として

和光中学校では、毎月「道徳の日」に、さまざまな人の生き方や社会情勢について話を聞き、自分自身の心と向き合いじっくり考える時間をもっています。

5月は、テノール歌手：新垣 勉(あらがき つとむ)さんの半生を通して、『オンリーワンの存在（二人といない大切な自分）』として生きることの大切さについて考えました。

【※ 裏面：放送内容】



☆ 1年生 ☆

- これからは、誰かと自分を一点のみで比べて卑下（ひげ）しないようにしたいです。『自分だけの自分』に目を向けて自信をもちたいと思いました。
- 人生は何度でもやり直せることが分かった。
- ぼくはこの話を聞いて、こんなにも悲しいことがあることを知りました。終戦後の貧しい中で生まれ、さらに失明してどんなにつらかったか知れません。ぼくは一つの命を大切に生きていきます。
- 人生つらいことがあってもいいこともあると分かった。前向きに生きていきたいと思った。
- 二つとない自分の命を大切に生きていくことが大事だと分かった。

☆ 2年生 ☆

- 最初、父も母も憎いと言っていたが、城間牧師やイタリア人の歌の先生のおかげで、初めて父と母への感謝の気持ちがわいてきた。この場面を聞いて、人は、つらいことがあっても人との出会いで変わることができるということが分かりました。
- 周りの人に人生をめちゃくちゃにされて自殺を図るまで辛かったのに、たった一人隣にいてくれる人がいるだけで新垣さんは救われたんだなと思いました。誰かが自分のことを分かってくれるだけで、人は人生を変えられるんだなと思いました。

☆ 3年生 ☆

- 新垣さんは、いろいろな悲劇を経験し、一人孤独な日々を送ったから、歌の中の少女の気持ちが分かるのだと思った。「オンリーワンの存在として生きていこう」というメッセージを心に残したい。
- 新垣さんは、最初、母や父を恨んでいて、見つけたら殺してやると思っていたけれど、城間さんと出会って『オンリーワンの存在』として生きていくことが大切だとわかった。私も『オンリーワンの存在』になりたい、そう生きていきたいと思いました。

★保護者の皆様へ

お子様と意見の交流をして、ぜひ感想などを気軽にお寄せください。

切り取り線

保護者通信欄（お子様を通じて担任へお渡しください。）

歌手、新垣勉（あらがき つとむ）さんの半生についてお話しします。

1952年、メキシコ系アメリカ人の父と日本人の母の間に生まれた新垣さんは、生まれて間もなく失明の悲劇に見舞われます。新垣さんが生まれたとき、出産の手伝いをした産婆（さんば）さんが、目薬を入れようとして、誤って家畜を洗う時に使う毒性のある「劇薬」を目に入れてしまったのです。目が見えなくなった新垣さんを残して父親はアメリカへ帰り、行方がわからなくなりました。そして、母親は、別の男性と結婚しました。母を知らない新垣さんは、祖母のことを「お母さん」と呼び、よく訪ねてくる『本当の母』を『お姉さん』だと信じて育ちました。

ある時、両親のことを知った新垣さんは、母親を前にして、次のように言いました。

「なんで僕を産んだんだ。殺してくれたらよかったんだ。」

その後、新垣さんは何もかもが嫌になり、ついに自殺を図ります。幸い命を落とさずに済んだのですが、それからまもなくして祖母が亡くなり、ひとり残され、孤独な日々を送ることになります。中学2年生、13歳のときのことでした。

そんな新垣さんの心の支えは、ラジオから聞こえてくる『歌』でした。ある日、ふと聞こえてきた賛美歌に誘われるようにして町の教会へ入った新垣さんは、牧師である城間さんと出会います。新垣さんは、城間さんに言います。「父も母も憎い。大きくなったら父を探して殺してやるんだ。」と。城間牧師は、新垣さんの話を涙を流しながら黙って聞いていました。「こんな僕のために涙を流してくれる人がいる」、そう感じた新垣さんに、城間さんは、「私たち家族と一緒に暮らしませんか。」と言ってくれました。3人の娘さんと同じように愛情を注いで育ててくれた城間さんと同じ牧師の道を選んだ新垣さんでしたが、歌への情熱が捨てきれず、武蔵野音楽大学へと進みます。大学で出会ったイタリア人の歌の先生に、「あなたのような深く澄み渡る声をもつ日本人には会ったことがない。その声は神様からの贈り物だ。その声で、聞く人の心を励ます歌を歌いなさい。」と言われます。その時初めて新垣さんは、自分に命を与えてくれた父と母への感謝の気持ちがわいてきました。それから今日(こんにち)に至るまで、新垣さんは数々のコンサートで歌い続けてきました。その歌とともにコンサートの中で人々に伝え続けているメッセージがあります。それは、「『オンリーワンの存在(二人といない大切な自分)』として生きていこう。」です。

さて、ここで、皆さんに新垣さんの歌声を聞いてもらいます。

新垣さんの代表曲『さとうきび畑』の作者である寺島氏は、終戦から27年が過ぎたある日、沖縄の地を訪れました。まだ、沖縄が日本に復帰する前のことです。歌の主人公である一人の少女は、第二次世界大戦の沖縄地上戦で死んでしまった父親の顔を知りません。やがて大きくなると、少女は父親の姿を求めてさとうきび畑へ行きます。「何のために父は戦ったのか、なぜ殺されなければならなかったのか、敵兵から身を隠していた人々は、洞窟の中で、何を恐れて自らの命を絶ったのか……。」通り抜けていく風の音を聞きながら、ただ静かに悲しみを歌います。

■ さとうきび畑 ■

作詞・作曲 寺島 尚彦

歌 新垣 勉

〔※ ざわわ ざわわ ざわわ 広いさとうきび畑は ざわわ ざわわ ざわわ 風が通りぬけるだけ 〕

今日も見渡すかぎりに みどりの波がうねる 夏の陽ざしのなかで

〔※繰り返し〕 むかし 海のむこうから いくさがやってきた 夏の陽ざしのなかで

〔※繰り返し〕 あの日 鉄の雨にうたれ 父は死んでいった 夏の陽ざしのなかで

〔※繰り返し〕 知らないはずの父の手に 抱かれた夢を見た 夏の陽ざしのなかで

ざわわ ざわわ ざわわ 風に涙は かわいても

ざわわ ざわわ ざわわ この悲しみは消えない